

特集 今の恋愛、本当にいい関係ですか？デートDV考



20代の女性のうち5人に1人が、実際に何らかの形で恋人間の暴力(デートDV)を経験したことがあると言われています。今回は、「デートDVについて考える」ために学生と一緒に「恋愛カフェ」等のワークショップに取り組んでおられる斎藤真緒准教授(立命館大学産業社会学部)の「教職員さんかく講座」での講話の中から、いくつかのポイントをご紹介します。



斎藤 真緒 准教授

「なぜ、今、デートDVか？」デートDVの背景・・・恋愛と結婚の仕組み

家制度が日本の社会の中で支配的だった段階では、恋愛ではなくて、家のための結婚(お見合い結婚)が主流でした。家制度が廃止されたのは第二次世界大戦以降ですが、お見合い結婚と恋愛結婚が逆転するのは、1970年代です。恋愛結婚の文化は、まだ30~40年の歴史しか持っていないということになります。

また、恋愛結婚が普及した当初は、結婚を前提としたお付き合いがほとんどでした。しかし現在は、「結婚する前にいろんな人と付き合ってみて、より良い相手を探す」という形に変わってきています。若いだけでなく、親世代にもこうした考え方が反映されていることがあります。必ずしも結婚につながらない恋愛が広がってきたことが、恋愛の早期化や若年化と非常に密接に関わっていると考えられます。

男性も被害者に

DVは、主に男性から女性に対する暴力として捉えられてきましたが、デートDVでは、心理的な攻撃という点で、特に、男性が被害者になるケースが高いという調査結果もあります。内閣府の調査でも、20代の男性の約10人に1人はデートDVの被害経験があります。男性も傷つき悩んでいる人がいるということに配慮していきたいものです。



若い世代に「恋愛プレッシャー」の広がりが・・・

学校で一緒に過ごす時間が長い若者にとって、自分に恋人がいるかいないかということが、友人の中で優位性を確保するための一つ的手段になっていることがあります。私たちはこれを「恋愛プレッシャー」と呼んでいます。恋愛それ自体は、他者と深くかかわる非常に貴重な経験です。しかし、「恋愛プレッシャー」の問題は、どのような恋愛がしたいのか、相手との付き合い方についての自分なりの基準を確立することと結びつくのではなく、とりあえず誰かと付き合うことが優先されてしまうことです。「恋人がいないよりは、いる方がまし」「一人だとさびしい」といった動機から誰かと付き合うことも少なくありません。

したがって付き合い方も、いわゆるベタリとかイチャイチャという形容詞がまさにふさわしい、非常に親密度が高い付き合いになりがちです。お互いの意見の違いをコミュニケーションを通じてどのように乗り越えていくか、お互いのプライバシーをどう尊重していくかといった、恋愛関係を築くうえで大事なことが軽視されてしまうと、過干渉や束縛といったDV的な行動を容認してしまう関係が広がってしまう危険性があります。

見えない暴力と携帯電話への依存

DVという言葉を聞くと、身体的な暴力のイメージが非常に強いですが、例えば殴られていなくても、つらい思いをしている若い人たちはたくさんいます。DVの種類として、当然身体的な暴力はありますが、それ以外にも、心理的な暴力一言による暴力、性的な暴力、経済的な暴力、社会的な暴力などいろんな形の暴力があります。特に、社会的な暴力は、人間関係を制約したり、活動領域を制限するような行動で、殴られていないから大丈夫だと思込み、非常につらいにもかかわらず、恋愛関係の中に身を置き続けている人が多くいます。

この社会的な暴力をより助長させる道具として、携帯電話などのパーソナルメディアが大きな役割を果たしています。特に若い人たちの間では、友人関係・恋人関係を構築・維持していく上で、携帯電話に対する依存度が非常に高くなっています。携帯電話を使った行動の制限とか、交友関係の制約、こうしたものが非常に加速していると考えられます。例えばメールチェックをする、異性のアドレスを勝手に消去する、また、GPS機能を使って行動を監視する、逐一どこで何をしているのか報告させる・・・、このような「見えない暴力」の広がりが、実は非常に大きい問題をはらんでいると考えます。

見えない暴力の場合、身体的な暴力と違って、気づかぬうちに進んでしまいます。また、いつから始まったのか非常に曖昧です。恋愛がはじまった当初は、お互い楽しく盛り上がり、毎日のようにメールを交換したり、長電話をしたりします。でも、いつの間にか・・・「あれ？ 何でこんなに、息苦しいんだろう。あまり楽しくない」と気がついたときには、既に一方的な関係に陥ってしまっているケースが少なくありません。デートDVというのは、非常にグレーゾーンが多いと言われています。身体的な暴力は痛みを伴い分かりやすく見えやすい暴力なので、暴力を受けた方も、暴力をふるった方も自覚しやすいのですが、束縛や過干渉、人間関係の制限というのは、どこまではOKでどこからがNGなのかははっきりせず、気がつかぬうちに徐々に進んでいきます。

恋愛と携帯電話の密接な関係。たしかに携帯電話は便利で特に若い世代にとっては不可欠なツールになりつつありますが、使い方によっては大きな危険性をはらんでいることに注意する必要があります。



束縛イコール恋愛という思い込み

デートDVを助長する要素として、「束縛=恋愛」という思い込みをしている人たちが非常に多いということが挙げられます。一方だけが、恋人との時間を確保するためにやりたいことを我慢したり、他の友人関係よりも恋人との関係を優先してしまうと、自分がやりたいことや恋人以外の人間関係がどんどん縮小してしまいます。自分の居場所・人間関係を恋人中心に作り上げてしまうと、別れたいと思っても自分一人になってしまうという強い不安感があり、なかなか別れられない関係になってしまいます。

デートDVの発生しやすい要因がいくつかありますが、ジェンダーの問題—男は女をリードしなくてはならない、女は相手を立てなければならない—も密接にかかわっています。「おごる」「おごられる」という経済的な関係が、体の関係を正当化させる手段になったり、何でも相手任せにしてしまい、自分の意見をきちんと伝えることをおこ

たっていると、関係のバランスは崩れやすくなります。また、気持ちやコミュニケーションにかかわる問題もとても重要です。相手のことをずっと好きだった場合、相手が自分にとって嫌なことをしたとしても、嫌われたらという気持ちが先に立ってしまい、ノーと言いつらい関係が出来上がってしまうこともあります。相手を好きだという気持ちと、自分にとって嫌なことについてノーということは全く別のことです。また、相手に対する不信感や嫉妬から、自分の感情を上手にコントロールすることができずに、相手を傷つけてしまうこともあります。基本的なことではありますが、相手に自分の気持ちを上手に伝える、相手の気持ちをきちんと理解するということが、恋愛コミュニケーションの土台であることを確認しておくことが大切だと思います。

支援者としての関わり方は・・・

実際にデートDVの被害者や加害者かもしれないと思う若者に接するときは、まず、信頼関係を形成することが大切です。本人が話せるところから徐々に話してもらおうのがよいでしょう。特に被害者になっている場合、「今の恋愛は本当にいい恋愛なのか」ということを、ひとつひとつ紐解きながら一緒に考えてあげることが、大事だと思います。「どんなところが好きなの?」「嫌だと思ってるのは?」「どんな楽しいことがあった?」「つらいことはどんなことだった?」「本当はどんな恋愛がしたい?」「これからどんなことにチャレンジしてみたい?」などを聴きながら、「今の恋愛が自分にとってどういう意味を持っているのか」を一緒に考えていきます。考えたことを書き出すことで、被害者自身が自分の恋愛を客観的に自覚することもできます。自己で考えながら選択・実行をしていくプロセスには、時間がかかりますが、結論だけを急がずに寄り添っていくことが大事です。

暴力を振るっている相手を責めてしまうと、被害者は相手のことを好きなので、かたくなに相手をかばうという心理が当然生まれてきます。加害者の人格を責めるのではなく、自分にとって、その恋愛のつらいところは何かということから自ら認識させていくことが大事です。別れ話をしても説得されて元の関係に戻ってしまうこともあります。しかし、だからといって被害者を責めることは絶対避けてほしいと思います。別れを決意・実行するにあたって、気持ちは大変揺れやすい状態にあるので、恋人以外の人との信頼関係がとても重要です。責めることなく、彼女、彼らの判断を尊重しつつ、それ以外の道はないのかということと一緒に考えるプロセスをぜひ大切にしてほしいと思います。